

紅梅

今瀬剛一

春の月親切すぎるのも嫌ひ

梅檀は樗の花と母のこと

灯台へ登つて下りて青き踏む

開戦日なり飴一つ噛み碎き

満開のシクラメンなり抱いて受く

杖一本買ひ冬晴へ退院す

凍瀧のきしむ音して深夜なり

紅梅白梅弘道館の沸き上がり

降り続く落葉ときどき訃の知らせ

喜んで出て紅梅と出会ひけり

梅檀の香りと遠きむかしかな

先駆けの紅梅海までも晴れて

すすめすすめと前方に春の海

紅梅を見上げたる顔陽の射せり

とりあへず橋までとシガ生まれけり